

動労「本部」革マル反動分子・権力 一体となった

デッチあげ「6.12事件」才1回公判闘争を堂々展開

日刊 動労千葉

81.10.29
No. 881

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五ノ六(公衆)電話二七二〇七

くきこいさむとったデッチあげ性

一九七九年、三月三〇日、我が動労千葉が分離独立して二年七ヶ月、動労「本部」革マル反動分子との組織争闘戦に、一三〇〇組合員の階級的良心と労働運動の正しい路線のもと、断固として闘いぬき、勝利した。このことに心底恐怖した、動労「本部」革マル反動分子は、ことあるうに、動労としての階級的戦闘的闘いの伝統に泥をぬる反階級的行為に走った。「6・12事件」デッチあげ告訴をもって動労千葉の組織破壊を策動しようが、われわれは一三〇〇組合員と全国の労働者の階級的矜持にかけて、公判闘争において徹底的に断罪し満天下に明らかにするものである。

三名の仲間が三時間に亘り、堂々と意見陳述

第一回公判は、十月二七日、千葉地方裁判所、刑事第二部法廷で開かれ、権力によって不当にも起訴された三人の仲間を先頭に、千裁内外、一五〇名が結集し、延べ三時間に亘り堂々と冒頭の意見陳述を行った。

- 一、動労「本部」革マル反動分子の反階級性
 - 二、動労千葉の三里塚を基軸にすえた路線的正義性
 - 三、動労「本部」革マル反動分子による動労千葉への暴力的組織破壊攻撃の犯罪性
 - 四、「6・12」の一〇〇%のデッチあげ性
 - 五、千葉県警・船橋警察・検察の不当な弾圧への糾弾
- と、堂々と意見陳述し、法廷を圧倒した。

「傷害」の事実は一切触れられず、沈黙してしまった検察側

これに対し、検事は、検事側冒陳の中で「6・12」が一〇〇%デッチあげであるが故に、この間動労「本部」革マル分子が、動労千葉に対する組織破壊攻撃を暴力のみゆだねてきた犯罪にふれることができずに終始沈黙であった。さらに動労千葉弁護団より「『傷害』で起訴したのなら、各三人の具体的実行行為を明らかにせよ」と追及したが、当然にも検事は答える事ができず、第一回公判は動労千葉が終始圧倒して終了した。しかし、今情勢が反動化に向かっている事、それに沿った司法権力裁判所も又反動化しており、これからの公判闘争は一時も息をぬくことは許されない。結局、権力・当局も又、動労「本部」革マル反動分

子のデッチあげ告訴を利用し、三里塚ジェットを闘い、三十五万人体制粉碎を闘いぬく動労千葉組織破壊を狙っており、そういう立場で権力・裁判所が公判廷にのぞんでいる事をみすえなければならぬ。

公判終了後150名の組合員、弁護団、法廷で闘う3名の仲間は、千葉運転区にて報告集会をかちとった。報告と決意にたつ菅野弁護団長。



「デッチあげ性が鮮明となった。必ず勝利する！」
—三名を囲んで、公判報告集会—

公判終了後、場所を千葉運転区庁舎前にうつして総括集会を開き、関川委員長、三人の被告団および弁護団、支援にかけつけてくれた仙台・全金本山労組からの決意表明をうけた。

三名をがっちり囲んで闘っているところ
—関川委員長—
「6・12デッチあげ事件」は、動労「本部」に